

合同句集

北 斗

一水句会

北斗旬会へ



「北斗旬会十年の歩み」

挿入俳画 石田恵穂

北斗句会(一水句会) 会員 (入会順)

石田きよし (平成十五年三月)
高山清山 (平成十五年三月)
土井義彦 (平成十五年三月)
深見十万 (平成十五年三月)
山縣秀雄 (平成十五年三月)
田中資郎 (平成十六年八月)
川瀬 亮 (平成十六年九月)
藤田紀潮 (平成十七年九月)
宮下ひかる (平成十七年九月)
竹内富雄 (平成十八年十月)
速水紫洲 (平成十九年十一月)
西村昌二 (平成二十二年四月)
太田黒幸雄 (平成二十二年二月)
大森康正 (平成二十二年二月)
長池政彦 (平成二十二年五月)

序 … 「一水」から「北斗」へ…

石田きよし

「一水句会」は、平成十五年三月に産声を上げた。

防衛大学校七期生の集まり「北斗会」は、「一水会」という昼食会を毎月第一水曜日に開催している。その席上、たまたま「鳴」俳句会での体験談をしていたところ、「我々も一水会の後で俳句会をやろうじゃないか」との声が上がった。そして、「一水句会」と名付けられた俳句会は、毎月開催されることとなった。

瓢箪から駒、めくら蛇に怖じず、で始まった「一水句会」は、その後ほとんど休むことなく開かれて、今年十周年を迎えた。

「北斗会」は、毎年七月に総会・懇親会を開催する。その際、「一水句会」の

会員の「自薦句」を百余名の出席者に配布するのが恒例になった。この「自薦句」は、「五句」「七句」の年もあったが、会員数の増加とともに「三句」に定着した。この度はその「自薦句」のみを編集したので、各会員の句数は、参加年次によって異なっている。

本句集は、「一水句会」の十年間の歩みの記録であるとともに、会員個々の「自分史」でもある。そこで句集のまとめ方も、過去の「自薦句」を修正しないこととし、編纂も自力でやろうということになった。この句集が体裁を整えているのは、藤田紀潮、竹内富雄両氏の「尽力」の賜物である。

本句集の発刊を機に「北斗句会」に改称することが会員の総意となった。五名から始まった「一水句会」は、現在十五名の陣容になっている。「北斗会」か

ら協賛も頂いて、会友には女性の参加もある。まさに「継続は力なり」で「北斗会の俳句会」、「北斗句会」への転機は熟した。

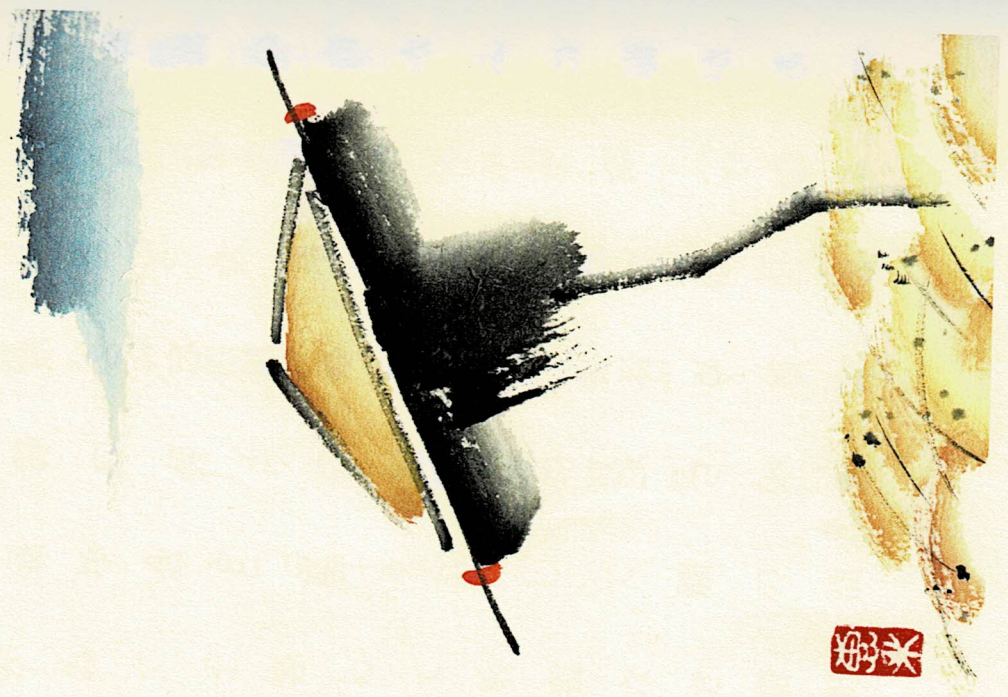
平成十七年から数年にわたって指導を受けた、「鳴」俳句会の富沢敏子氏の言がある。「一水句会の句は真面目だが、遊び、軽みに欠ける」「何もかも詠み込もうとして、省略が足りない」と。その後の精進で一水句会の句は、伸長に見るべきものもあるが、氏の指摘は今も正鵠を得ている。

我々は三十数年、いつも「I H 5 W」を日常とし、「正確、適切」を身上としてきた。だが、俳句は文学である。写生による発見と感動を基本としつつ、省略や諧味や虚の世界が俳句の神髄なのである。「北斗句会」への脱皮を機に、会員一同さらなる研鑽に期するところがある。



目次

会員名簿.....	3
序文.....	4
俳句.....	10
随想.....	125
あとがき.....	141



石田きよし

海がある (平成十五年)

元朝のひとの流れに逆らへり
鳥帰る忘れぬといふほめ言葉
螢火に大和魂見透かさる
石段の初蝉までは数へたり
雲の峰海の向かふに海がある

10

新鮮 (平成十六年)

みんなを過ぎかなかなの下で逢ふ
生身魂さらりと言へぬ嘘は止せ
新鮮なレタスのやうに着ぶくるる
楽章の終りし瞬の淑気かな
あのなあと座り直して爛の酒
妻がゐて子等ゐて地雷なき青野
ふるさとは湖風とこの鮎鮎と

11

育ち盛り (平成十七年)

生意気の裏に愛嬌サングラス

万緑や育ち盛りの六十五

寒椿落ちるしかなく落ちにけり

赤とんぼの急反転に思いつく

ふるさとを言ふにぼどりの湖をいふ

勝ち負け (平成十八年)

絹さやの筋ほどのこと気にしをり

留守番のさてとつぶやき目刺焼く

ふと上を向く出目金の思案顔

勝ち負けの好きなをとこの種選び

にぼどりに知られてをりぬ氏素性

大 吉 (平成十九年)

好きなことしてゐるかほの落葉焚

物言ひも風鈴の音も角がとれ

初詣大吉のこと言はずをく

趣 味 (平成二十年)

仏にも鬼にもなれず梨を剥く

母看るを趣味てふ父の夏来る

夏帽子新調したる妻に遇ふ

青 近 江 (平成二十二年)

水 に 生 れ 水 に 育 て り 青 近 江

荒 瀬 に も 懐 あり て 鮎 光 る

か な かな の 一 途 や わ れ の 失 せ し も の

一 直 線 (平成二十三年)

木 洩 れ 日 を 縫 ひ 取 る や う に 蟻 走 る

鐘 の 音 の 一 直 線 に く る 寒 さ

帳 尻 を 合 は す を と こ の 胡 瓜 採 み

落しもの (平成二十三年)

引き鶴の落しものめく水の月

ほどほどのほどに迷ひつ剪定す

毀れゆく父の手をとり年惜しむ

決断 (平成二十四年)

決断を迫るうなぎの暖簾かな

鍵の合ふ鍵穴ひとつ冬北斗

湯たんぽや今は戦前かも知れず

高山清山

春疾風 (平成十五年)

初御籤 そろりと開く娘かな
白波の海に向かつて吟稽古
先駆けて庭の白梅咲きにけり
荒川の鉄橋揺るる春疾風
光る海遠くにふはり帆掛け舟

三番瀬 (平成十六年)

寒声や三番瀬をも揺るがせる
春の鴨浮きつ沈みつ船溜まり
大花火闇の底から熾りたる
友逝きて夏めく寺に集ひけり
天気良し冠雪の山耀けり
露天風呂心の満ちる冬紅葉
椽の実や門入る人の前に落ち

海 の 青 (平成十七年)

海 の 青 より 穂 芒 の 白 き か な

鯨 釣 り の 竿 並 び け り 今 朝 の 海

寒 釣 り や は る か に 富 士 を 望 み つ つ

ず わ い 蟹 誰 彼 黙 す 夕 餉 な り

凶 札 を 手 に 付 め る 初 参 り

冴 え 返 る (平成十八年)

自 販 機 の ち や り ん ご ろ ん と 冴 え 返 る

鈍 色 の 海 よ り 帰 雁 飛 び 翔 け る

退 職 と さ ら り と 伝 ふ 夏 見 舞 ひ

秋 の 蚊 の 鈍 き 羽 音 で 目 覚 め け り

今 日 も 来 た 喪 中 便 り の 師 走 か な

冬 日 (平成十九年)

掃き寄せてなほ美しき柿落葉

24

植木屋の冬日にひかる長鋏

大根の土の匂ひも買ひにけり



25

土井義彦

寒立馬 (平成十五年)

門松や切り目鋭く立ちぬたり
凍土割り這ひ出たる芽の柔きこと
尻屋崎どつしり春待つ寒立馬
枝先に芽吹かむとする力あり
峠越へ海まで届く若葉風

秋気配 (平成十六年)

焼く秋刀魚まだ海の色目の黒さ
葱刻むいつもの朝の軽ろき音
寒椿躊躇ひも無く落ちにけり
卒寿なほ初生花や母の指
夕日落ちほてりの残る簾巻く
昨日とは違ふ風あり秋気配
落ち蝉や終の羽ばたき仰向き

ひっかかり (平成十七年)

網戸引くいつもの所のひっかかり

戻りたる流燈闇へそつと押す

唾えられ鮭の黒き目宙をさす

煮凝りや胸に納めし愚痴の数

病床へ畳目ほどの日脚伸ぶ

踏踏 (平成十八年)

辛夷咲く啄ばみ易き所から

病明け両手に余る土筆摘む

古希近し躊躇ひつつも半ズボン

秋あかね恩師さらりと逝き給ふ

出勤に昨日の追儼豆を踏む

結 願 (平成十九年)

初日いま地をはなれむと揺れにけり

結願を得て新緑に身を浸す

みるみると大赤富士になりゐたり

百 日 紅 (平成二十年)

寒 柝 の 強 き 音 に て 終 り け り

百 日 紅 少 年 野 球 の 砂 埃

除 夜 の 鐘 い く つ か 残 し 眠 り け り

口 笛 (平成二十二年)

なにもかも炬燵に遠し留守独り

自づからなぞる口笛初音かな

いまだ手に熱き豆もて鬼は外

暑 氣 払 ひ (平成二十三年)

湧泉の音なき砂の動きかな

暑氣払ふ要なき者の暑氣払ひ

虫時雨歩毎新たな音色かな

白菜の尻二三撫で一つ買ふ (平成二十三年)

白菜の尻二三撫で一つ買ふ

退院し揃ひて夜の端居かな

昨日と違ふ風あり夜の秋

去年今年癌と付き合ふ夫婦かな (平成二十四年)

去年今年癌と付き合ふ夫婦かな

春一番温くなるべし墓の中

よく乾く一人住まひに南風かな

深見 十万

凛々し (平成十五年)

溪流のせせらぎ涼し九十九折
最涯てや残雪分けて夜汽車来る
苦舟の行く手阻むや花筏
はんなりと鴨川をどり幕開きぬ
梅雨晴や帰還将士の顔凛々し

飛鳥山 (平成十六年)

木枯しや鴉の止まる枝細し
神籤引く若き人垣梅早し
亡き妻に似たる官女の黒き髪
飛鳥山櫻三分のさんざめき
漁火を闇に溶かしてさみだるる
兵の先陣の跡鵜飼舟
夕まぐれ風絶えてまた蝉しぐれ

熱 爛 (平成十七年)

年 新 た 気 負 ひ て 登 る 男 坂

熱 爛 や 遠 来 の 友 よ く 語 る

夜 明 け か と 見 ま ご ふ ば か り 雪 明 り

七 夕 や 還 ら ぬ 妻 の 夫 婦 箸

か り が ね や ね ぐ ら の 先 の 茜 雲

五 重 塔 (平成十八年)

朱 の あ せ し 五 重 塔 や 花 ぎ ぼ し

し が ら み を 流 す つ く ば い 花 菖 蒲

ふ と 合 ひ し 観 音 の 目 や 蝉 時 雨

透 析 の 終 は り し 友 と 居 待 ち 月

葉 桜 や 世 辞 の 少 な き 山 の 宿

洛 北 (平成十九年)

上 賀 茂 の 杜 の ど よ め き 競 べ 馬

大 原 女 の 紅 の 櫛 や 若 葉 風

洛 北 や 夏 鶯 と せ せ ら ぎ と

福 寿 草 (平成二十年)

牡 蠣 飯 の 湯 気 遮 り し 夕 日 か な

篝 火 に 揺 る る 鐘 楼 年 暮 る る

透 き 通 る 日 差 し に 緩 む 福 寿 草

余 白 (平成二十一年)

不揃ひの風の形に萩ゆるる

南無妙の余白埋めたる蝉時雨

廬舎那仏七堂伽藍秋日和

いつしか (平成二十二年)

送り火のいつしか消えて黙深し

人も木も影絵となりし遠花火

一茶忌やいつしか居つく迷い猫

雅

(平成二十三年)

葵 挿 す 勅 使 の 肩 に こ ぬ か 雨

卯 の 花 や 齋 王 代 が 唐 衣

曲 水 の 雅 を 今 に 朱 盃 酌 む

44

大 欠 伸 (平成二十四年)

大 欠 伸 す る 猫 の る て 小 春 か な

落 葉 掃 く 老 僧 の 背 に ま た 落 葉

水 底 に 鯉 ひ そ と 居 て 年 暮 る る

45

山 縣 秀 雄

大 夕 焼 (平成十五年)

古 寺 の 明 る さ 戻 す 梅 の 花
遠 足 の 声 が 弾 け る た ん ぼ 道
う た た 寝 の ト ン ネ ル 出 る や 大 夕 焼
青 空 や 葉 に 育 ま れ 蓮 の 花
翺 雲 波 と 戯 む る 子 供 た ち

46

青 空 (平成十六年)

点 々 と 夕 日 に 映 ゆ る 牡 蠣 筏
冬 の 海 競 ふ 如 く に 波 し ぶ く
子 供 ら の 遊 ん で を り ぬ 凍 て し 道
タ ン ポ ポ や 子 ら の 声 な き 滑 り 台
青 空 や 視 野 に 広 が る 藤 の 花
植 え 込 み の 満 天 星 躑 躅 空 青 し
夕 風 や 点 々 て ん と 家 明 か り

47

石 榴 (平成十七年)

静 寂 や 団 地 に 集 く 虫 の 声

ふ る 里 の 紺 碧 の 空 石 榴 熟 る

朴 落 葉 舞 ひ た る 空 の 青 さ か な

夕 暮 れ の 駅 に コ ー ト の 襟 立 て て

背 を か が め 遠 き 灯 り や 雪 の 道

着 飾 つ て 泣 く 子 笑 ふ 子 千 歳 船

転 び し 子 笑 顔 の ま ま の 夏 隣

弁 当 の 豆 こ ぼ れ 落 つ 花 見 か な

山 々 に 光 と 影 や 稲 を 干 す

押 入 れ の ス ト ー ブ 探 す 母 の た め

山 嶺 (平成十九年)

山 嶺 に 夕 陽 の 沈 む 寒 さ か な

夕 風 や 渚 へ 伸 び し 人 の 影

山 小 屋 に 閉 鎖 の 告 知 初 し ぐ れ

若 葉 (平成二十五年)

幼 子 の 指 の な で た る 若 葉 か な

秋 空 の 奥 へ 奥 へ と 煙 立 つ

あ れ こ れ と 引 き 出 し 開 く る 冬 支 度

春 水 (平成二十二年)

春 水 の 流 れ に 沿 う て 歩 き を り

病 窓 は 額 縁 の ご と 鯉 の ぼ り

野 球 帽 忘 れ て 戻 る 秋 暑 し

夏 の 海 (平成二十三年)

若 き 子 は 沖 へ 沖 へ と 夏 の 海

盆 踊 り 好 き で 櫓 の 人 と な る

葉 桜 の 水 滴 一 つ 光 り を り

富士山 (平成二十三年)

海原に浮かぶ富士山青嵐

赤とんぼ風乗り換えて過ぎりけり

短日や警官二人走りをり

南天 (平成二十四年)

南天の闇に突き刺す流星

滝の音近づくほどに冷気かな

ひといろいろの風に吹かれて川蜻蛉

田中資郎

祭囃子（平成十六年）

年賀状この人誰ととがめ顔

バレンタインチョコレートのそつと在り

冴え返るとげある言葉交わしけり

十日後の道もまたよし桜かな

車椅子傍を離れず白日傘

夕闇のバスの窓から夏の蝶

なほ続く祭囃子や神田川

白紙 (平成十七年)

舞茸や自慢話の鍋囲む

長き夜や白紙のままにペンを置く

渡し舟ふれあふ肩に初しぐれ

初釜の客それぞれに誉れ顔

寒暄の石段上る元気なり

穴埋め (平成十八年)

仕事とは穴埋めに似る夏に入る

洒落つ気は父に及ぼず夏袴

秋晴れや競歩の臍に吹きし塩

分福と添へし自然薯届きけり

送る会鯪鱈鍋にはじまりぬ

いちにち (平成十九年)

北窓を開きいちにち遼太郎

桜葉ふる戒名の十四文字

父の日や性分合わぬ娘もつ

岩弾く若葉かすめて青き水

百代の木の下闇や一人行

曲がらずに惑ひもならぬ蟻の列

春の音 (平成二十二年)

ふたりゐて温みを分かち福寿草

うとうとと張子の虎とはや四日

かりんとう谷中銀座の春の音

石榴裂くやゐのちの証しありなむと

五月闇メルトダウンの軽ろきかな

卯の花腐し男ばかりの喫茶店

西行忌 (平成二十三年)

西行の忌よゆく水の青きかな

蟻のみちはずれし蟻の黒きかな

辿りきてなほ下闇の径なりし

不用の用 (平成二十四年)

落し文母に仕置きを受けしこと

枯木立不用の用の月日かな

冬木の芽ひかりを集め声を呼ぶ

川瀬 亮

麦 踏 (平成十六年)

堰 堤 を 覆 ひ つ く せ り 葛 あ ら し

66

熟 年 の 生 き 方 思 ふ 寒 牡 丹

麦 踏 の 父 の 背 大 き か り し か な

木 の 芽 和 母 の 口 癖 よ み が へ る

夏 立 つ 日 テ ニ ス の 肘 の 疼 き け り

我 が 影 に 素 早 く 散 れ り 白 目 高

今 度 こ そ と 意 気 込 む 妻 の ら つ き よ 漬

67

海 鳴 り (平成十七年)

秋 の 夜 や 海 鳴 り ば かり 旅 の 宿

天 井 の 木 目 模 様 や 虫 の 夜

冬 浅 き 母 と 寄 り 添 ふ 妻 の 肩

妻 よ り の 焼 芋 温 し 掌 に も ら ふ

静 け さ を 切 り 裂 く 子 等 や 雪 の 朝

天 の 川 (平成十八年)

万 緑 や 阿 蘇 の 連 峰 風 渡 る

天 の 川 一 度 は 見 た い 青 地 球

駅 伝 の そ し て 駅 伝 三 が 日

朝 市 の 声 の 響 け り 春 の 風

自 転 車 の 切 り た る 風 の 余 寒 か な

木の葉髪 (平成十九年)

秋惜しむふたりがかりの蕎麦こねて

木の葉髪寝癖もひよいと直しをり

薫風の玉砂利踏むや神気満つ

路の臺 (平成二十年)

長き夜や合はなくなりし眼鏡の度

寒明けの茶碗蒸しこそ母の味

路の臺揚げて茶塩に箸を割る

麦 踏 (平成二十二年)

草 も 木 も 風 の 匂 ひ も 更 衣

あ と 追 ひ し 麦 踏 む 父 の 背 中 か な

秋 天 や 俄 か 庭 師 の 枝 は ら ひ

光 の 朝 (平成二十二年)

見 上 げ れ ば 雲 の 教 え て く れ る 秋

初 明 り 余 生 の 扉 開 け て 待 つ

霜 解 け て 光 の 朝 と な り に け り

七 輪 (平成二十三年)

散る花に風の形の見えにけり

静けさを積み上げてゆく夜の雪

七輪のなほ生きいきと年の市

鬼やんま (平成二十四年)

白髪のが影黒き炎暑かな

鬼やんま風を均して飛びにけり

紫蘇の実の煮詰められたる妻の味

藤田紀潮

寒北斗 (平成十七年)

甲板に出れば雲間の寒北斗
月明の館山湾に錨うつ
蝸や小江戸に今も時の鐘
地球儀を廻はす晦日の閏秒
お茶漬けにへしこのこひし四日かな

光芒一闪 (平成十八年)

朝八時艦旗あぐるや淑気満つ
菜の花や波の彼方は太平洋
パナマ運河岸の茂みにあかき花
満月に向かひて艦のまつしぐら
雪しまく光芒一闪はしる海

雲の峰 (平成十九年)

とほり雨花菜堤を渡りけり

国後の近くて遠し雲の峰

秋てふの麓こえゆく大師堂

夏岬 (平成二十年)

もう古希か いやまだ古希ぞ屠蘇を干す

子の言にじつと聴きぬる胡蝶蘭

老空母しづかに航けり夏岬

泥 大 根 (平成二十二年)

梅 花 藻 に 触 る る 手 先 の 白 き か な

泥 大 根 で ん と 積 ま る る 道 の 駅

切 干 や 白 寿 の 母 の 手 の 匂 ひ

無 限 大 (平成二十三年)

万 緑 や 空 を つ か み て 嬰 立 ち ぬ

無 限 大 微 分 積 分 鯛 雲

小 春 日 や 鶴 折 る 母 の ひ と り 言

七 つ 星 (平成二十三年)

来 し 方 は 言 は ず 語 ら ず 滝 桜

新 茶 汲 む 母 の 手 元 の 若 や ぎ て

掌 に 天 道 虫 の 七 つ 星

罫 網 (平成二十四年)

罫 網 を 解 く や 岬 に 二 重 虹

ま た ひ と つ 嘘 の 見 抜 か れ 椿 落 つ

死 に た い と 母 の 口 癖 ね ぎ 坊 主

宮下ひかる

鯿跳ねる (平成十七年)

竿灯や弓なり戻し大喝采
宇治川の浮き舟偲ぶ秋彼岸
逗子の海夕日に透かし鯿跳ねる
峠の落葉万葉人も踏みしかな
ひめゆりの乙女や緋寒桜満つ

縄文杉 (平成十八年)

エルミターージュ聖母が招く五月晴
インカなる石組み固く東風優し
紅葉狩オシラサマには絹着せよ
山鉾は雨と厄とに挑みけり
万年の南風に耐ふ縄文杉

航 跡 (平成十九年)

妓 王 寺 の 女 紅 葉 に 安 ら ぐ や

硫 黄 島 流 人 も 入 れ の ど か な 湯

フ イ ヨ ル ド に 航 跡 一 本 虹 か か る

千 畝 の ペ ン (平成二十年)

夏 風 千 畝 の ペ ン は 走 り 継 ぐ

船 遊 び 蘇 州 に 聞 こ ゆ 李 香 蘭

韓 の 宮 倭 寇 の 去 り て 山 笑 ふ

喜 望 峰 (平成二十二年)

喜 望 峰 イ ン ド に む か ふ 阜 月 波

象 の 親 子 隠 し 隠 る る 夏 の 川

ツ ン ド ラ に 大 河 蛇 行 し 夏 来 た る

跳 ね 橋 (平成二十三年)

跳 ね 橋 や 日 永 に 撮 れ ど ゴ ッ ホ の 絵

初 旅 や か も め も 乱 舞 ナ イ ヤ ガ ラ

風 薫 る 自 由 の 女 神 幾 年 ぞ

アモイたち (平成二十三年)

強東風や島見守りしアモイたち

冬空に雄叫び三つ横跳ぶ猿

神無月ストーンベンジ留守になり

寝釈迦空し (平成二十四年)

南風に乗せ水島帰ろ釈迦空し

日永なりエアーズロック四つん這ひ

先輩のデイサービスや花水木

竹内富雄

初雲雀 (平成十八年)

初雲雀 つつと畑を過ぎにけり
しばらくは紅葉時雨の中に佇つ
筆をもつ仕事に年のあらたまる
青饅のをとこ料理も義母の味
枥の実の音ひとつしてふりかへる

桜餅 (平成十九年)

看板に江戸文字のあり桜餅
還り来るひと皆若く盂蘭盆会
ひとつだけ別の声する蝉しぐれ

終の棲家 (平成二十年)

つばくろや終の棲家の定まらず

大空の雲を掴んであめんぼう

下駄の緒の締めまり確かむ秋祭

弓 矢 (平成二十一年)

浴衣がけ弓矢を置いて十五年

古稀迎へやつと素になり初詣

きのふより一羽減りたる軽鳧の雛

寒 北 斗 (平成二十二年)

またひとり逝くとの便り寒北斗

風吹けばかぜのふくまま糸柳

北からは慟哭ばかり春たより

山 桜 (平成二十三年)

苔むしてなほ意気盛ん山桜

日盛や時計気だるくひとつ打つ

台風の尖兵なるや雲走る

あめんぼ (平成二十四年)

あめんぼう追ふあめんぼがひよいと避け

部屋ひとつ大の字の占む日の盛

旧友の太き筆跡新茶汲む



速水紫洲

野点 (平成十九年)

若葉風一句生まれし野点かな

夏神楽千古の木々や伊勢まいり

樟若葉映る池面に鯉群れる

懐古 (平成二十年)

花や舞ふ幼馴染と古希の宴

初燕頬りになくや母逝きぬ

萤火や森の奥からノクターン

暮 色 (平成二十二年)

春 宵 や 叙 勲 の 宴 に 里 神 楽

ひ え び え と 暮 色 彩 る 八 重 桜

緑 陰 の も れ 日 枕 に 仮 寝 か な

潤 ふ (平成二十二年)

古 稀 に 佇 つ 初 日 漲 る 九 十 九 里

梅 雨 入 り や 閑 け さ 深 む 地 蔵 堂

十 重 二 十 重 も み ぢ 潤 ふ 古 刹 か な

花だより (平成二十三年)

リハビリを終える日夢み遅桜

はたとせの記念彩る花水木

玉砕の死語とはなりぬ花だより

月明り (平成二十四年)

忍ぶ恋あるやも知れぬ猫の恋

ドイツへの日取り定まる麦の秋

介護する妻の背にさす月明り

西村昌二

息づかひ (平成二十年)

風かほる街ゆく人の息づかひ

托鉢のうしろすがたやつばめ追ふ

ふるさとの山の若葉やあらたふと

満目 (平成二十二年)

花に酔ひ人にも酔うて千鳥足

五月晴れ満目光る大地かな

あかぎれを見ぬこの頃や母想ふ

独り酌む (平成二十二年)

初富士の空を切り取る白さかな

風船を持つ子の笑まふ母の胸

祭笛とほきに聞きて独り酌む

嘆き (平成二十三年)

春や春またひとたびの嘆きかな

春の雪わらべの声も聞く間なく

夏きざすながるる雲の白さかな

梅のかほり (平成二十四年)

孫来る寒さ押し退け笑み来る

暮れなずむ街の灯りや雪積もる

ひそやかな梅のかほりや二人連れ



太田黒幸雄

一 輪 (平成二十二年)

生垣に赤き一輪寒椿

白梅のぼつと明るき夜道かな

緑蔭や憂きことしばし忘れをり

萩 (平成二十二年)

萩の美の趣き愛でる年となり

黄水仙刃の如き芽一寸

はくれんを目印に訪ふ夕間暮

羅 漢 (平成二十三年)

染井散り八重を待つ間の無沙汰かな

一円と落葉を膝に羅漢かな

名月やえくぼも陰をつくりをり

新 酒 会 (平成二十四年)

ぐい呑みの紺鮮やかに新酒会

散りてなほ樹の下染むる椿かな

盗つ人に七分の理あり山椒の芽

大 森 康 正

古 稀 (平成二十二年)

億 万 の 命 い た だ き 古 稀 の 春
打 つ 滝 に 白 衣 の 絡 む 寒 参 り
雲 の 峰 湧 き 立 つ 峰 や 奥 秩 父

朧 夜 (平成二十二年)

朧 夜 の 遠 く に お は す 辻 地 蔵
食 細 る 介 護 の 父 に 初 が つ を
冬 至 湯 や 香 り で 流 す 年 の 垢

初 せ り (平成二十三年)

初 せ り の 華 は 大 間 の 鮪 こ そ

万 緑 を 味 は ふ ご と く 渡 る 風

月 影 を 背 負 つ て 帰 る 介 護 か な

夏 め く や (平成二十四年)

点 眼 の 滴 に 光 る 初 日 か な

大 仏 の 胸 の 厚 さ や 若 葉 風

夏 め く や 秩 父 連 峰 雲 を 吐 く

長池政彦

鵜

(平成二十一年)

白神の神の律儀や春一斉

曳かれゆく片羽の欠けし夏の蝶

鵜先に動く幼虫汗拭ふ

彼岸花 (平成二十二年)

表紙なき父の歳時記彼岸花

手もみしつ漬け菜取り出す初水

震災の悲しみ底に春の海

杖

(平成二十三年)

傘 立 て に 杖 そ の ま ま の 初 盆 会

冬 の 海 校 碑 ひ と つ の 母 校 か な

盛 衰 を 呑 み 込 む 渦 や 瀬 戸 の 夏

122

余

寒 (平成二十四年)

捨 て か く る 手 桶 の 水 に 昼 の 月

会 釈 受 け 記 憶 も ど か し 冬 隣

一 輪 の た め ら ふ や う な 余 寒 か な

123

随 想



吾が名つれづれ

小学校に入校して、一（はじめ）ちゃんという遊び仲間ができた。ある時父に言った。「一ちゃんの漢字は書き易くてええなあ。潔はいちいち面倒や」と。日ごろ温厚な父がこの時は怖かった。徴兵で派遣された中国の戦場で、生と死のほざ間にあつて、「潔よく生きたい」という心境の発露からの命名だつたという。

四人兄弟の次男の私は、二人の妹から「きよつちゃん」と呼ばれていた。長男の兄貴は、敬意をこめて「兄ちゃん」だつた。ある時おふくろに言った。「僕も兄ちゃんやんか、不公平や」と。そこでおふくろは提案した。「おつきい兄ちゃんとちつちやい兄ちゃん」ではどうかと。この妙案を妹達は無視して、今日に至るも

石田きよし

「きよつちゃん」のままなのである。長じて、防衛大入校時の自己紹介で、「きよしは清潔のケツです」とやったのが不覚だつた。何日も下着を洗わなかつたりしていたので「不潔のケツ」があだ名になつた。いまでも同期会で「よう！ケツちゃん元気か」などと言う奴がいる。いいかげんしてもらいたいのだが、歴史問題がからむと弱いのである。

「鳴」俳句会に入会後、俳号を「きよし」としたのは良かった。日常と違う自分がいて、如何ようにも変身できるような気安さが気に入っている。

にほどりに知られてをりぬ氏養性

人生の重大事案と俳句

人生上の重大事案とは私の場合、妻の死であった。今年一月五日に私の見守る中で静かに息を引き取った。

予想はしていたもののショックの大きさに驚き、我が身がどうなっているのか自覚できない状態だった。その中でしつかりしなければ、やらねばならぬことが一杯あり、今すぐその準備に取り掛からねばならないと思う緊張感に身震いするほどであった。

句会の仲間から、「土井は、奥さんの句ばかりで、解かりやすい」という言葉もあったが、何時も頭の中には妻のことしかなく、出てくる俳句の構想は現実の事柄しか浮かんでこない。

土井義彦

そこで、浮かんでくる妻に関する出来事をなんとしても振り払い、意図的に花鳥風月の方向に切り替える努力をし、何とか乗り切れたのは十月になってからのことであつた。

俳句では「乗り切った」感はあるが、独り住まいの生活では女々しいことだが、妻の思い出が色々強烈に思い出され、時には涙ぐむ事もある。冷静に考えると、この感情を無理して振りきるのは俳句の本道ではなく、間違つた方向に進もうとしているのではないかと不安になる。

今は出てくる感情に素直に従い、自分なりの表現方法で進もうと思つている。これが自分史を作る事だろうと思つう。

句集によせて

平成十年に家内を亡くしてからも会社勤めをしながら、何か趣味を持ちたいと思つていた矢先、石田主宰から俳句の会に誘われ、平成十五年に入会させていただき、今日に至りました。

はじめは、季重なりや切れ字の二重使用など、数々の指導を受けたのも、今では楽しい思い出となっております。

慣れとは恐ろしいもので、毎月の句会に投稿するとなると、常に俳句を作ること念頭に物事を見るようになり、視野・視点が今までと全く変わつてしまいました。これも大変有難いことと思つております。

深見十方

現在の私の生活は趣味に溢れており、狂歌にすると、次の通りです。

「朝俳句 昼のダンスに 夜の唄

酒をお供に 海外旅行」

このように、常に視覚・聴覚は元より味覚・嗅覚・触角を働かせ、朝から晩まで、楽しいことを見つけたつ、これからも頭脳と身体を活性化して、百歳までは無理でも、せめてオリンピックは見に行きたいものだ、と考えております。

これからも主宰をはじめ、皆さんのご指導をよろしく願ひします。

一瞬の出会い

私が俳句を始めた経緯は、約十年前に石田師匠から、今度俳句会を始めるので航空出身者を集めて貰いたいと話しかけられたのが始まりです。

早速五人に声を掛けたら全員が「ZO」の返事でした。仕方なくと素人で文学的才能なし、無芸多趣味の私が航空代表で入会することになりました。

五・七・五の十七文字に自分が見たり、聞いたり、感じたことを表現するためには先ず豊富な語彙が必要であり、読書量が物を言う世界であると認識せざるを得ませんでした。

歳時記は必需品と教えられ、季語の勉

山縣秀雄

強が必要であると自覚しながらもなかなか勉強が出来ずに今日に至りました。

趣味の写真と俳句の共通点は、一瞬を切りとることです。但し、俳句の場合、用語が出てこないため表現不足に何時も悩まされます。

俳句を始めてから、周りの自然現象に注意を払うようになりました。特に花の咲く賞季節感と季語の時季ずれに出合うことが多くあります。

今後、歳時記の勉強を通じて思考の幅が拡大するように努めていきたいと思えます。

俳句十年

俳句を詠み始めて、かれこれ十年が経とうとしている。趣味は俳句と、胸を張って言えるほどではなく、一向に上達したとも思えないのだが、なぜか続けている。

俳句を始めた頃、妻は、あなたに俳句がつかれるのと、わらって見ていた。文芸とか芸術とかに、縁遠い暮らしをしてきた者が、いきなり俳句の作り方などの本を買って求め、四苦八苦の苦吟に励む？姿は、傍目にも滑稽そのものであつたらう。どうせ直ぐに投げ出すに違いないぐらいに見ていたと思う。その反発もあるのだが、今、俳句に嵌まっている。

田中資郎

俳句を詠むことで、錆びついた、錆びようとしている頭の錆びを剥がし、少しリフレッシュしたかと自己満足している。詩的な感情、感性とか、素直な正直な自分のここを呼び覚ましてくれると感じる、そういう瞬間がある。俳句のささやかな効用、楽しみではある。

加えて、一水句会は格別な場となっている。大人の会話が尽きない。教わり、なるほどと感心し、腹からの笑いが生まれる。俳句の楽しみが一挙に膨らむ場だ。そして、少しはましな俳句を詠みたいと思ひ、上手くなりたいと願うのである。

一水句会への想い

私は、一水句会に平成十六年九月から参加しました。思い返せば、平成十六年七月の北斗会総会の懇親会席上、石田師匠と田中資郎君が、俳句について話している横で、何気なく話を聞いておりました。これがきっかけになって、一度一水句会を見学しようということ、その年の九月から参加したのです。

私は、俳句について、季語があるということも知らない全くのど素人でした。それから九年、曲りなりにも、続けられたのは、石田師匠の丁寧にして、暖かく包み込むような指導によるものと、思っ

川瀬亮二

ております。

加えて、一水句会のメンバーが、同期生の枠を超えて、裸の人生観を率直にぶつけ合える句友へと、成長していることです。

月一回の一水句会は、三時間余のものですが、濃密な人生観のやりとりを感ずる刺激を受けています。次第に、一水句会に出席することの喜びを、感ずるようになりました。一水句会を通じて、人生観や美意識の違いを知ることも出来ました。また、俳句を作るために、季節感を感ずる感性を磨こうと考えるようになりました。私の成長を感ずるところです。

俳号が招きよせた奇縁と奇遇

初参加（平成十七年九月）の句会に、実名の「紀世資」で臨んだところ、主宰の俳号「きよし」と紛らわしかったことから、本名以外の俳号を持つこととなった。誕生年の皇紀二千六百年の「紀」を残し、海に因む「潮」を拾って、「紀潮」とした。主宰から「いい俳号です、わが師は伊藤白潮」と。その後、この俳号が縁となって、奇縁奇遇が重なっていく。

防大同期（海）の小川敏也君の中学時代の恩師は、蛇笏賞なども受賞した著名な俳人、能村登四郎。彼の句界活動の基盤は伊藤白潮とともに市川（全国有数の俳句の盛んな町）で、両氏の交流は極めて深いものであった。

昨年春、市川市の里見公園を散策する

藤田紀潮

機会があり、公園の一隅に伊藤白潮の句碑「来歴のやうに一本冬の川」を発見。なんと、この句碑設立（平成二十年六月）の幹事役が、石田きよし氏であった。用地提供の協力者であった市川市役所の担当部長が能村登四郎の子息で、きよし師は今も交流があるとのこと。

句碑は江戸川の畔、富士山とスカイツリーを望む小高い丘の上に建っている。この地方一帯には縄文遺跡もあり、万葉の歌にも詠まれ、戦国時代、北条家と里見家が戦った古戦場でもあった。伊藤左千夫の「野菊の墓」ゆかりの地も近い。

冬の川のぞむ小高き白潮碑 紀潮

今関心あること

特に小生には独り住まいの高齢者問題がある。玄関のマットはいつの間にかずれて居り何のことはない、足が上がっておらず、引きずって歩いている証拠。まずボケ封じ十か条

- ① バランス食
- ② 病気の予防
- ③ 適度な運動
- ④ 規則正しい生活
- ⑤ 転倒防止
- ⑥ 好奇心と興味
- ⑦ 表現の努力
- ⑧ コミュニケーション
- ⑨ 若さを保つ
- ⑩ 気分爽快に生活

を掲げ励行。これらをまとめると海外旅行は月に一回。食事は自分で三食作り食材調達からゴミ捨てまでやる。

宮下ひかる

一水句会への参加は恰好の場となり、大いに感謝。少し敷衍すると、①は、炭水化物、蛋白質、脂肪をそれなりに、但し、ご飯の馬鹿食いは避け、塩分脂肪は控え目、そして、無機質、ビタミンを加味した食財と料理。食事以外には要するに外に出て歩くこと。形は旅行や、買い物、散歩と様々。それに、社会参加。即ち何かのクラブに参加、今のところ、放送大学の人間研や、街の熟年ダンディズム。結果、嘗て宣言した平成五十五年五月五日子供の日を健康で楽しく迎えよう。

幾山河越えさり行かば寂しさの
終てなむ国そ今日も旅ゆく

色紙「残心」によせて

私は、書齋に「謝竹内富雄雅兄 昭和五十八年三月十六日 統幕議長矢田次夫『残心』と書かれた色紙を飾っています。この色紙は、議長が退官されるとき議長室に呼ばれて戴いたものです。その時、議長は涙ぐんでおられた。発する言葉の意味は、発した人そのものや、その時の場の雰囲気といいますか空気によつておおいに異なります。その時の状況を充分理解しないと解釈はできません。

『残心』と書かれた色紙をどんな気持ちで書かれ、私に何を伝えようとされたのか、時々振り返ります。「心を許すな。」「次に備えよ。」「後は頼む。」など解釈

竹内富雄

は難しいですが、私に、謝と雅兄を使われたことから推測して自分なりに受け取って解釈しています。

当時は、冷戦のただ中で私は共同作戦の研究の担任幕僚として心血を注いで「まとめ」に専念していました。が、議長在任中には完成できず、やはり、議長の心には残るものがあつたのでしょうか。

俳句は解釈を相手に託した短い言葉・文章です。この作者は、「どのような生い立ちの方で、どんな環境・状況でこの句を作ったのかを理解して初めてその俳句が解釈できる。」と、いつもこの色紙を眺めながら思います。

昔、備前の国の小村に「瓢水」という、村人から尊敬を受けていた庄屋がいた。禅の高僧は、余りに村人から尊敬を受けていたので、一度会って話をしたく思い庄屋の家を訪ねにいったが、庄屋は不在であった。小僧が出てきて「今、主人は薬をもらいに医者のところへ行っている」と答えた。

「なんだ、そのように高僧になってまだ未練がましく延命に興じているのか、いまだに死に対する覚悟ができていないようでは、村人から尊敬されるほどの人物ではない」と捨て台詞を残して家を出て行った。

主人(庄屋)が、家に戻ってきて、「まだその高僧は遠くに行くまい。これを届け

て・・・」と、次の俳句を渡すように小僧に命じた。

浜までは海女も暮さる時雨かな

この句を見た高僧はうなずき、庄屋は、海女が、浜まで来れば海に入りずぶ濡れになるので、少しくらい時雨が降っても、合羽を着て体を冷やさぬよう身を大切にするように、私は一日でも長く命ながらえて、村人のためにつくすべきだと考えています。

私も、一日でも長生きして世の一隅を照らしたいと考えて居ます。

俳句への誘い

小生の俳句の兄貴分は「紀潮」さんです。四年程前になりますが、観梅に行った折、何気に五七五を並べて「梅を観て待ちきれなくてさくら詠み」と彼に送ったところ、彼の奥様から「梅は梅良く愛でてからさくら詠み」と言う返句？がありました。昔、地方の俳人たちが俳諧師の来訪を首を長くして待ち、集って俳諧をまき、楽しんでいた遊びとは、これだな！と「知的な遊びの面白さ」に接したような気がしました。その後、紀潮さんからの誘いもあり、そろそろ戸外のゴルフ等から室内の趣味へ転向するべき時だと感じておりましたので、良いタイミングで句会に参加した次第です。

太田黒幸雄

この句集にも織り込んだ句ですが「萩の美の趣き愛でる年となり」を句会に出した時、誰かが「この句ができたのは、俳句をやってきた感覚のお陰ですね。」と言ってくれましたが、自分でもそのような感じがしています。

俳句をやるまでは何とも感じなかった自然の美しさに強く感動を覚えるし、物を観る目が変わってきたように感じています。

現在、毎日のように通っているスポーツ・クラブで体力の維持に努め、東京オリンピックを元気に迎えたいと思っています。

俳句を生涯学習の意識で始めたのは、丁度七十歳でした。歳時記を購入し、一気読みの積りでしたが、直ぐに頓挫、有効な学習法でないことを納得した次第でした。現在はボチボチ息長くスタイルで句会の予習復習と週一回の新聞俳句欄の記録整理等が、計画学習となっております。

俳句に対する現在の心境ですが、正直面白く感じております。それは、何と云っても句会の雰囲気と得られる知識のあることです。また、日頃から歳時万象に対する関心が深く細やかになり、生活に潤いがプラス等々。此処で己の作句を顧みますと、句会で指摘されるのは「説明

ばい」「新聞の見出し」「一言で全部を言つて……」等、チェックポイントと有難く受け止めております。また、語彙が乏しく、現実の感動を同等の重みの言葉で描写できないこと、逆に実際の感動以上に粉飾してしまい、自己嫌悪を感じることもあります。核心的課題と考えております。

私の人生哲学の基軸は、神仏の信仰にありますので、心や魂と云つたものに思いを至らすのが日常です。この事から、作句においても花鳥風月を愛でると同時に、心の風景や人生観の滲む描写が出来たらと思う次第です。

邂逅

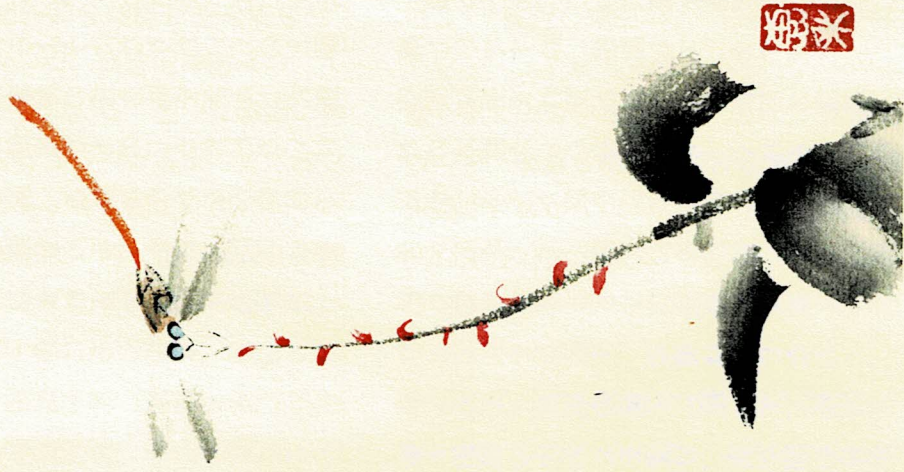
長池政彦

菜園生活を楽しみだして二十有余年、今ではグループの最古参。一方、一水句会は入会して四年目、中堅風だけど後ろには誰もいない最新人。ところが、この古参と新人の相性がすこぶるよろしい。

武蔵野原の一角にある畑は、俳句の材料には比較的恵まれている。花鳥風月、四季の変化を楽しめる。ただ、問題はそれを料理する所、これはなかなか容易ではない。今は簡単なものしか作れないけど、いずれは素材の持ち味を活かした創作料理も作れるようになりたいものと夢が膨らむ。さらに、この出会いは、今まで体験したことのない新しい世界を味あ

わせてくれる。畑の隅に、ぶどう棚を利用した休憩所を設けているが、それまでの汗を拭くだけの休憩から、この頃は句帳と鉛筆の出迎えを受け、異空間の旅が楽しめる。愛用の椅子に座って、ゆつたりと周囲を見渡す。環境は同じなのに、色も匂いもさまざまに変化した新しい景色が広がってくる。おまけに、いつの間にか、うたた寝を貪っていたりして、ただの木陰から心身を癒してくれる上質な空間に生まれ変わる。この新旧の邂逅、嬉しいですね、感謝しています。

願わくは、この快適な空間を、もうしばらく楽しむことが出来ますように。



あとがき

平成十五年三月、石田きよし主宰の下、わずか五人で立ち上げられた「一水句会」は、今や十五人のメンバーに及ぶ。選暦や古稀を過ぎたズブの素人から始めた仲間が、このレベルにまで向上できたことは、まさに、きよし師の熱意あふれるご指導の賜物です。殊に、句会后、主宰により整理された「相互評」は、句会不参加者への便宜は勿論、復習する際の好個の資となり、句作や鑑賞法の向上にはかり知れない役割を果たしてきており、他の句会に類例を見ないものでしょう。

僭越ながら、途中参加の小生が句会の開催数や十周年のことを話題にしたことから、自身が過去十年の自薦句集を整理することとなりました。作業を始めたところ、小生のパソコン操作が心もとないものであったことから、竹内富雄さんが見るに見かねて手伝ってくれることになり、とうとう、彼に全てを委ねてしまいました。このような短期間に句集として発行できることは富雄さんの献身的なご努力のお陰です。

また、句集の随所に挿入されている俳画は、主宰の奥様（石田恵穂さま）の手になるもので、そのご好意に深く感謝致します。

この句集の誕生を機に句会は「北斗句会」へと脱皮します。月一回の座ですが、我ら七十路親爺連の大いなる楽しみ事であり、更なる向上を目指して清吟に努めてゆきたいものです。

北斗句会く

一水句会十年の歩み

編集 一水句会

発行 平成二十五年十月一日

発行者 一水句会

住所 柏市篠籠田四五五十二

主宰 石田きよし

編纂者 藤田紀潮

竹内富雄

(非売品)